

寺山自然公園の 厚生的利用に関する調査研究

——特に厚生的利用者の実態について——

細 山 田 三 郎

Researches on the user of Terayama Natural Park
as the welfare facilities.

——Especially on the actual condition of the peoples who
use the public welfare.——

Saburo Hosoyamada.

I 緒 言

寺山自然公園は、鹿児島市中心より北東10km海拔 425mの地点吉野町寺山に所在し、霧島屋久国立公園の特別地域であり、一部分は鹿児島大学教育学部寺山総合試験地に所属している。

市民には風光明媚なところとして知られているが、ただ眺望がよいというだけで施設がなく、せっかくの公園も「森林の保健的（厚生的、休養的）利用」にあまり役立っていないと思われる。しかし近年ではレジャーブームで、県内および県外からの客も相当あるので、その実態調査を行って寺山自然公園が、鹿児島市の森林地帯として保健的利用の今後のありかたについて研究する。

本調査は1965年10月から11月にかけてと、1966年4月から5月にわたって行ったが、多数の行楽客によって一応所期の目的を達成することが出来たと信じている。勿論このような調査は、かかるアンケート、特定の時期、限られた客だけで充分とはいえないが、これを出発点として順次調査の範囲を拡め所期の成果を収めたいと念願している。

又著者は、この調査が将来予想されるこの地帯の開発計画に対して1つの規準を与え、一方において一般的な自然休養地開発計画理論に、発展すべき研究に寄与するものであることを期待している。

なお西田政善教授、農学部初島住彦教授に種々御指導を戴いた。ここに記して謝意を表する。

II 調査の方法

行楽客の利用できる場所は、広場、展望台、マツ林の下、雑木林の中等であるが、原則として広場と展望台を限定した。

調査は著者1人で行い、時間は午前8時から17時までとし、その間展望台の特定場所に第1表の如き実態調査用紙を置いておき、書き込みを求め（筆答式）、一方広場では直接行楽客に質問して口答を願った（口答式）。又17時以降夕暮れまで（相当の客がある）と、早朝8時以前（ほとんどいない）にも調査した時があった。

調査時期としては、一年間を通して最も行楽客の多い春（4月、5月）と、秋（10月、11月）の



4ヶ月間としたが、天候その他に左右されて実質4月(14日間)、5月(24日間)10月(16日間)、11月(14日間)計68日間調査したことになり、その間の行楽客の約40%が調査対象になったと推定できる。

なお今回の調査では、行楽客の量よりも(休日は平均して平日の3倍の24グループが、天候の悪い時は良い時の2割程度のグループが、来訪すると推定できる)、むしろ質に重点をおいて、どのような客が、どのような気持で寺山を訪れ、そうしてどのような意見感想を持って帰ってゆくに重点をおいて調査した。

No.

第1表

寺山自然公園行楽客調査用紙

鹿大教育学部
寺山総合試験地

調査 年 月 日 天候 時刻

下記の該当事項に○印をつけて () 内にお書き込み下さい。

住 所	都道府県 市 町 村	あなたのお連れの方は	町 内 会 学 校 遠 足 会 社 , 役 所 , 同 僚 家 族 ず れ 友 達 同 志 そ の 他	学 令 前 小 中 学 生 高 大 生 青年(30才以下) 成人(30~60才) 老人(60才以上)	男	女
					人	人
職 業	男 女 (才)				人	人
					人	人

1) 寺山へお越しの経路は

市内から 竜ヶ水から
 帯迫から 菖蒲谷から
 市営バス 貸切バス
 乗用車 タクシー
 単 車 自 転 車
 徒 歩 その他 ()

2) 寺山へ以前にもお越しになりましたか。

始 め て 二 度 目
 三 度 目 それ以上 (度目)

3) 何時間いらっしゃる予定ですか。

30分以内 1時間
 1時間半 2時間
 それ以上 (時間 分)

4) 寺山へお出になった目的は。

遠 足 ハイキング又は遊山
 観 光 植物昆虫採集又は写生
 ドライブ その他 ()

5) その目的は達せられましたか。

十分に満足した どうか満足した
 あてがはずれた その理由 ()

6) 施設物は何もございませんが、次の施設でどれをご希望になりますか。

旅 館 食 堂
 休 憩 所 ケーブル遊園地
 ゴルフ場 その他 ()

7) 寺山公園をよりよくするため交通機関や施設その他についてご希望される点をお書き下さい。

()



写真1. 寺山自然公園から見た桜島と錦江湾

Ⅲ 調 査 結 果

第1表に掲げた調査用紙に対する行楽客の回答の結果を基にして、これらに検討を加えてみたい。

1. 行楽客誘致範囲

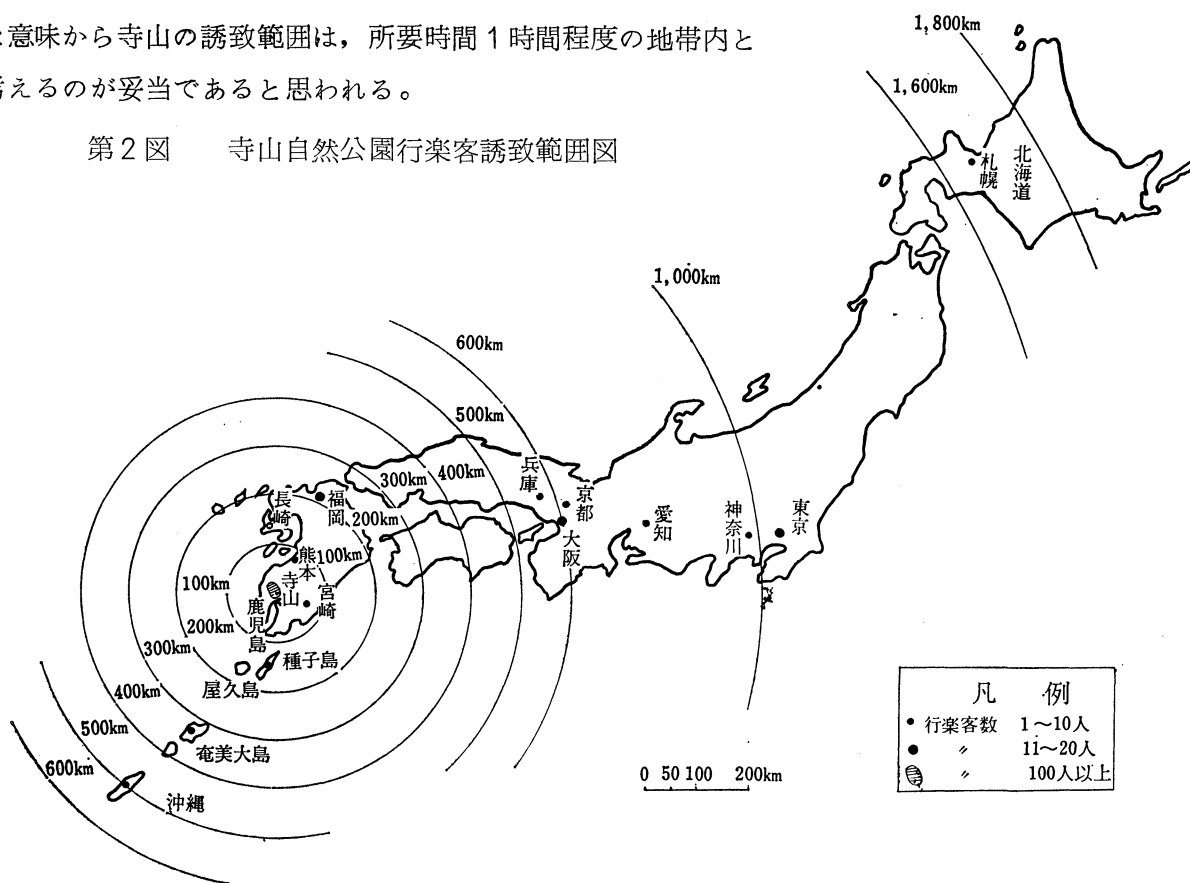
調査用紙に記入された行楽客の住所により、寺山を訪れる客はどの方面から、どの程度来るかの概況を述べる。住所については回収数450中429迄が記入しているので、95%が答えていることになる。第2表及び第2図に示すとおり、北は北海道、南は沖縄に至り全国にわたっているが、殊に鹿児島市が310で全体の約70%を占めているのは、以前からハイキングコースとして市民に親しまれ、且市中心から1時間たらずで到達できる便利さを持つ等から考えても当然といえる。

次に鹿児島県下(49)は、地元であり地の利からいっても当然であるが、特に注目すべきは福岡県(14)、大阪府(14)、東京都(17)である。これは遠隔の都府県在住者が、鹿児島市方面へ来た機会を利用して、寺山でそのひとときを遊ぶものと考えられる。

要するに寺山への行楽客は、鹿児島市を中心とする都市からの利用者が多く、全国的にもその来訪がみられるのである。しかしながら第3図によってみると、寺山を中心に鹿児島市、谷山市、始良郡を結ぶ約20kmの半径内が、寺山の誘致範囲とみることができる。

ただし交通不便のため、寺山からの直線距離のみによってその誘致距離を求める事は注意を要し寺山へ到達しうる所要時間を考慮する必要がある。このような意味から寺山の誘致範囲は、所要時間1時間程度の地帯内と考えるのが妥当であると思われる。

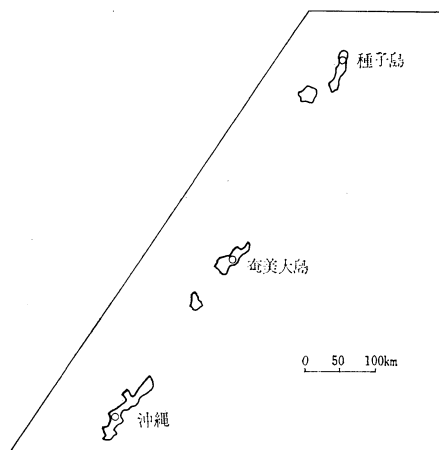
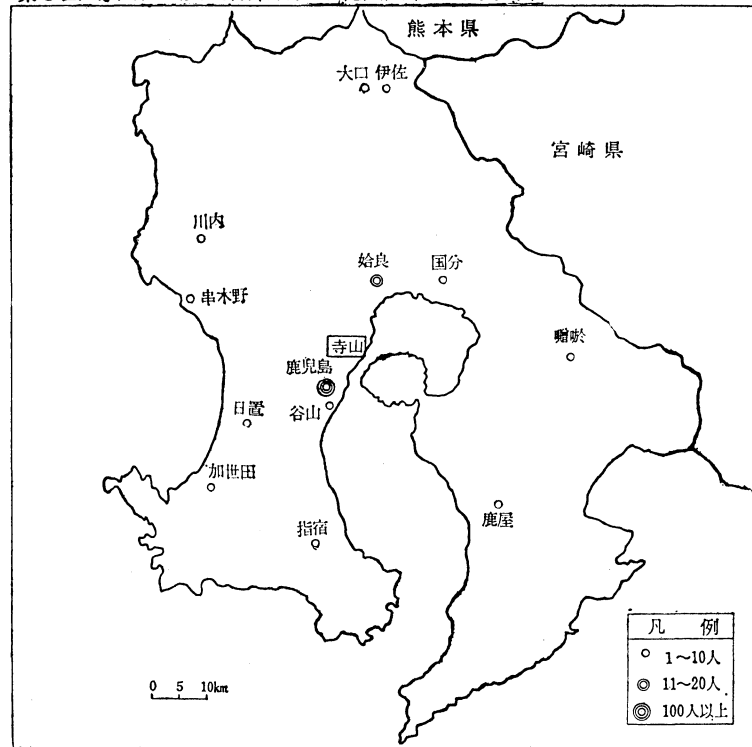
第2図 寺山自然公園行楽客誘致範囲図



第2表 名 地 別 行 楽 客 数

地 名	月 別	秋 (1965)		計	春 (1966)		計	合 計
		10 月	11 月		4 月	5 月		
鹿 児 島 市		63	82	145	65	100	165	310
鹿 児 島 県		10	14	24	8	17	25	49
谷 山 市			2	2		3	3	5
指 宿 市		1		1		2	2	3
串 木 野 市			1	1	1	2	2	3
西 之 表 市		1	1	2		1	1	3
大 口 市		1		1	1	1	1	2
加 世 田 市		1		1			1	1
川 内 市		1		1				1
国 分 市			1	1				1
鹿 屋 市					1		1	1
名 瀬 市			1	1				1
始 良 郡		2	1	3	4	7	11	14
日 置 郡		2	4	6				6
嚙 喉 郡			2	2		1	3	3
川 辺 郡					1	2		3
伊 佐 郡			1	1				1
大 島 郡		1		1			1	1
沖 縄					1			1
宮 崎 県		4		4			2	4
熊 本 県		3		3	2		1	5
長 崎 県						1	13	1
福 岡 県		1		1	5	8		14
兵 庫 県			2	2			8	2
大 阪 府		3	3	6	3	5		14
京 都 府			1	1		3	3	4
愛 知 県		1		1		2	2	3
神 奈 川 県		1		1		1	1	2
東 京 都		5	5	10	6	1	7	17
宮 城 県					1		1	1
青 森 県						1	1	1
北 海 道		1	1	2				2
回 答 な し		8	8	16	1	3	4	20
計		100	116	216	92	142	234	450

第3図 寺山自然公園行楽客誘致範囲図(鹿児島県下)



2. 行楽客の職業と構成

行楽客の職業についてみると、第3表の如くになり、回収数450中47%の213しか回答していないが、この内で会社員、学生、公務員の三者が全体の約75%を占めている。これに商業が続き教員、銀行員等が続いている。農業を営む者が僅か2しかなく、これは寺山がいかに都会人に人気があるかを示しているといえよう。

第3表

行 楽 客 の 職 業

職 業	月 別	秋 (1965)		計	春 (1966)		計	合 計
		10 月	11 月		4 月	5 月		
会 社 員		20	15	35	11	28	39	74
学 生		14	17	31	7	18	25	56
公 務 員		5	12	17	1	10	11	28
商 業 員		4	4	8	3	7	10	18
教 員		2	4	6	2	1	3	9
銀 行 員		1		1		2	2	3
看 護 婦			1	1	1	1	2	3
女 給			3	3				3
主 婦		2		2				2
農 業			1	1	1		1	2
セールスマン			2	2				2
建 築 家			1	1				1
工 業 家		1		1				1
画 家			1	1				1
警 官						1	1	1
自 衛 官			1	1				1
宣 教 師		1		1				1
バスガイド					1		1	1
ホ ス テ ス					1		1	1
オペレーター						1	1	1
運 転 手						1	1	1
紬 工						1	1	1
弁 護 士						1	1	1
無 職						1	1	1
計		50	62	112	28	73	101	213
調 査 数		100	116	216	92	142	134	450

次に行楽客の構成をみると第4表に示すように、友達同志が全体の42%を占め、友達と遊びに来るのが一番多いのである。世代の違わない同年輩の友人達と、このような山岳公園に来るのが、この年令層にはいろいろの意味で最も楽しいものなのであろう。次に家族連れ、会社役所の同僚と一緒に来るものである。学校遠足は36組で、特に小学校が28組でその内90%が鹿児島市内の学校であり、歩いてくる学校（片道組、往復組も含む）も10組あって、小学校の高学年からは、寺山は鹿児島市内から「歩く遠足」の場所としても適当と思われる。

第4表 行 楽 客 の 類 別

構 成 \ 月 別	秋 (1965)		計	春 (1966)		計	合 計
	10 月	11 月		4 月	5 月		
回 収 枚 数	100	116	216	92	142	234	450
回 答 な し	12	10	22	7	3	10	32
町 内 会	0	1	1	0	0	0	1
学 校 遠 足	10	8	18	5	13	18	36
会社, 役所, 同僚	16	14	30	13	17	30	60
家 族 連 れ	19	22	41	12	39	51	92
友 達 同 志	38	51	89	41	57	98	187
そ の 他	7	8	15	6	21	27	42

3. 行楽客の年令別, 性別, 時刻別

第5表には行楽客の年令別, 性別, および寺山を訪れる時刻について掲げた。年令別では, 小中学生が全体の約70%を占め圧倒的に多く, これは遠足で来たためである。遠足以外で来る者は60人しかいなく, 学校遠足以外で来る子供は非常に少いことを示している。高大生が 3,635人で, この内85%の 3,180人が高校生の遠足で来ている。このように学校遠足で来る行楽客数は, 全体の約90%を占めているが, 学校遠足を除いて考えた場合には, 行楽客数 1,837人の内約90%が青年, 成人, 大学生の三者で占め, 20代, 30代の若い世代層と, 大学の学生層に寺山がいかにも魅力があるかを示している。これに反し, 老人層 (60才以上) や学令前の層は少く, 家族連れといえども小人や老人はほとんどいないのである。

しかるに寺山の利用客は, 小中高生の学校遠足を中心としたものと, 若い世代を中心とした若い人々にとっては, レクリエーションの場として利用価値が充分にあると思われる。

次に行楽客の男女比は, 55:45でやや男子が多い。

又行楽客が何時頃に寺山を訪れるかというと, 全体の70%が午後 (12.00~17.00) に訪れている。これは1日寺山で過す必要はなく, 軽い気持で午後のひとときを寺山で過すために訪れるものと思われる。一面では交通機関不便のために, こんな結果を示したものと思われる。

ここに注目すべきことは, 17時以降夕方にかけて訪れる客が31組もあるというのは, 夕方の散策という気持で来る客と, 俗に「百万ドルの夜景」と称される鹿児島市内の夜の美しい眺めを見に訪れる車用族であって, 気候の良い時期や真夏には, その利用者は一層増えるのである。これに反し, 8時以前の早朝は1組しかなかったが, これは早朝の眺望が全然知られていないためであり, 今後おおいにPRすべきことである。

第5表

行楽客の年令別、性別、時刻別

() は学校遠足の分

年令別	月 別	秋 (1965)		計	春 (1966)		計	合 計
		10 月	11 月		4 月	5 月		
学 令 前		19	11	30	17	9	26	56
小 中 生		2,558 (2,545)	3,204 (3,190)	5,762 (5,733)	1,082 (1,070)	4,080 (4,059)	5,162 (5,129)	10,924 (10,864)
高 大 生		1,214 (1,100)	931 (810)	2,145 (1,910)	847 (770)	643 (500)	1,490 (1,270)	3,635 (3,180)
青 年		105	259	364	154	216	370	734
成 人		143	133	281	112	143	255	536
老 人		3	13	16	7	23	30	46
計		4,042 (3,645)	4,556 (4,000)	8,598 (7,645)	2,219 (1,840)	5,114 (4,559)	7,333 (6,399)	15,931 (14,044)
男	子	2,493 (2,215)	2,461 (2,135)	4,954 (4,350)	1,206 (970)	2,652 (2,318)	3,858 (3,288)	8,812 (7,638)
女	子	1,549 (1,430)	2,095 (1,865)	3,644 (3,295)	1,013 (870)	2,462 (2,241)	3,475 (3,111)	7,119 (6,460)
計		4,042 (3,645)	4,556 (4,000)	8,598 (7,645)	2,219 (1,840)	5,114 (4,559)	7,333 (6,399)	15,931 (14,044)
午 前	8 時 以 前	0	0	0	0	1	1	1
	8.00~12.00	19	27	46	22	33	55	101
午 後	12.00~17.00	79	88	167	66	84	150	317
	17 時 以 降	2	1	3	4	24	28	31
計		100	116	216	92	142	234	450

4. 行楽客の連れの人数

第6表には、行楽客が何人連れで寺山を訪れるかについて調査した結果である。二人連れいわゆるアバックが、全体の約40%を示し3人～6人連れが186グループで41%、両者を合すると80%でこのことから寺山を若い人達が2～3人のグループ、又は4～5人のグループで訪れるという事がよくわかる。続いて一人(単身)で来る人が20人もいて、寺山のような静かな所に都会からの騒音を離れて、1人静かに物思いに耽けったり写生したり、読書したりして孤独を十分満喫している人もいるのである。一方10人以上の団体や学校遠足は、1割を占めているだけである。

5. 来訪の経路

調査用紙第一項「寺山へお越しの経路は」という問に対する回答から、その利用交通機関を検討してみる。

第7表に示したように回答数450中「市内から」が最も多いのは、このコースが一番近道であり交通の便も良いからである。帯迫、菖蒲谷を通ってくるコースは、地理に詳しい人達である。又竜ヶ水駅で下車して登山してくるコースは、不便であり一番少いのは当然の結果である。

第6表

行楽客の連れの人数

月別 連れの人数	秋 (1965)		計	春 (1966)		計	合 計
	10 月	11 月		4 月	5 月		
0人(単身)	9	4	13	5	2	7	20
1(二人連れ)	39	43	82	37	58	95	177
2	8	15	23	12	21	33	56
3	17	21	38	13	19	32	70
4	8	11	19	6	12	18	37
5	5	4	9	8	6	14	23
6	1	2	3	1	1	2	5
7		1	1	2	4	6	7
8		1	1		1	1	2
9		1	1		1	1	2
10		1	1		1	1	2
10人以上	3	4	7	3	3	6	13
学校遠足	10	8	18	5	13	18	36

第7表

来訪の経路

月別 回 答	秋 (1965)		計	春 (1966)		計	合 計
	10 月	11 月		4 月	5 月		
回収枚数	100	116	216	92	142	234	450
回答なし	17	31	48	17	21	38	86
鹿児島"市内から"	74	75	149	73	100	173	322
竜ヶ水から	3	1	4	0	3	3	7
帯迫から	4	8	2	1	8	9	21
菖蒲谷から	2	1	3	1	10	11	14
鹿児島"市営バス"	9	18	27	13	19	32	59
貸切バス	4	6	10	1	8	9	19
乗用車	43	54	97	40	80	120	217
タクシー	8	7	15	14	7	21	36
単車	14	13	27	11	12	23	50
自転車	2	0	2	5	0	5	7
徒歩	8	9	17	3	13	16	33
その他	12	9	21	5	3	8	20

乗物では、乗用車で訪れたのが450中217組で48%を占め、行楽客の約半数は乗用車で訪れるわけであり、乗用車でないと寺山へは行けないという交通の不便さをここに示している。市営バスで訪れた客は59組で、案外利用するものが多いのである。これに単車、タクシーが続き徒歩で訪れた客が33組あったのは、歩いて来た学校遠足も含まれていて、若い年齢層にとっては寺山は適当なハイキングコースであると思われる。

又自転車で訪れた組は7組であったのは、寺山を訪れるには半分以上が坂であるため、サイクリングコースとしては不向きである。

6. 利用回数と滞在時間

調査用紙第二項「寺山へ以前にもお越しになりましたか」、及び第三項「何時間いらっしゃる予定ですか」という問に対する回答について検討を加える。即ち行楽客の寺山利用回数に関しては第8表の通りで、「初めて」というのが189に対して「二度目」88、「三度目」64「それ以上」が89でこの三者を合計すると241で、「初めて」より多いのである。つまり初めて寺山を訪ねるものより二度以上の者が多く、寺山登山客の53%を占めている。このことは大いに注目すべき事柄で、寺山の魅力と特色によるものであり、初めて訪れた客にある程度好ましい印象を与えた結果、数度の来訪を見たものと考えられる。今後すべての改善や開発には、このような行楽客が対象であることを銘記せねばならない。

第8表 寺 山 利 用 回 数

回 答	秋 (1965)		計	春 (1966)		計	合 計
	10 月	11 月		4 月	5 月		
回 収 枚 数	100	116	216	92	142	234	450
回 答 な し	2	7	9	5	6	11	20
始 め て	41	47	88	38	63	101	189
二 度 目	25	22	47	17	24	41	88
三 度 目	14	20	34	9	21	30	64
そ れ 以 上	18	20	38	23	28	51	89

次に行楽客の滞在時間については、第9表に掲げたように「30分」と答えたのが175、「1時間」が126で、この両者が全体の67%であることは、寺山には何ら施設もなく若い年令層にはすぐあきがるのと、本寺山自然公園が自然の雄大さを眺められるという事が、一番の特色である現状では、1時間以内で充分である。しかし「2時間」又は「それ以上」と答えた者を合計してみると、全体の21%になり、自然の雄大さを眺めると同時にこの静かな自然の中で都会の騒音から逃れて、2時間以上過す客もいるわけである。

第9表 滞 在 時 間

回 答	秋 (1965)		計	春 (1966)		計	合 計
	10 月	11 月		4 月	5 月		
回 収 枚 数	100	116	216	92	142	234	450
回 答 な し	3	11	14	5	8	13	27
30 分	44	43	87	42	46	88	175
1 時 間	32	30	62	16	43	64	126
1 時 間 半	6	9	15	6	8	14	29
2 時 間	8	13	21	14	23	37	58
そ れ 以 上	7	10	17	9	9	18	35

7. 寺山登山の目的とその印象

調査用紙第4項「寺山へお出でになった目的は」という問に対して、「ドライブ」143、「観光」97、「ハイキング又は遊山」105とそれぞれ答えているが、この三者の相違は行楽客には不明

確であつたらしく、必ずしも最良の問でなかったようである。前二者は消極的な静的レクリエーションを目的とし、後者は積極的な動的レクリエーションを目的とするものとして区別⁽⁴⁾したのであるが、これは不徹底であり、三者を混同させたようである。

要するに広義のレクリエーションを目的としたものが 345、即ち77%を占めていることは事実で都会人が自然に接し明日への英気を養わんとして寺山を訪れたものといえよう。

更に第5項「その目的は達せられましたか」という問を通して、寺山の印象を検討してみるに、
 「十分に満足した」 237、
 「どうにか満足した」 145で、両者の割合は約2対1で、寺山へ来たもののなかで、やや期待を裏切られたと感じたものが3人に1人はいるわけであるが「あてがはずれた」と答えたものが32で、全体の7%しかないところをみると、全く寺山に期待を裏切られたとする者は案外少ないのである。

しからば何が「どうにか満足した」と答えせしめたかを検討することは、重大な意義をもつ。即ち、まず「十分に満足した」と答えたものに、「眺望がすばらしい」と理由を述べた客が圧倒的に多いこと、及び「あてがはずれた」と答えたものに、その理由として「道路が大変悪い」、「施設が何もない」、「大変汚れている」と答えたものが多いこと。というのは、元来寺山が人工の施設で楽しむより、むしろ自然に接し前方には雄大な桜島と錦江湾を眺め、後方には牟礼ヶ岡、北東方向には霧島山系、国分、加治木、重富平野を、南東方向には開聞岳、南西方向には金峯山、野間岳吹上浜、東支那海を遠望でき、その間に鹿児島市内を一望に納めることができ、景観のよいことでは県下一、又はそれ以上であろうこの壮大な眺めが、都会人を驚嘆せしめるのである。これを味うためには寺山しかなく、ここに寺山の真価があるといつても過言ではあるまい。

第10表 登山目的とその印象

回 答	月 別	秋 (1965)		計	春 (1966)		計	合 計
		10 月	11 月		4 月	5 月		
目 的	回 答 な し	7	8	15	5	2	7	22
	遠 足	10	8	18	5	13	18	36
	ハイキング又は山遊観	21	25	46	27	32	59	105
	植物昆虫採集又は写生	20	23	43	19	35	54	97
	ド ラ イ ブ	3	2	5	0	6	6	11
	キ ャ ン プ	24	36	60	31	52	83	143
	そ の 他	0	0	0	0	0	0	0
		15	14	29	5	2	7	36
印 象	回 答 な し	9	7	16	10	10	20	36
	十分に満足した	50	66	116	50	71	121	237
	どうにか満足した	36	33	69	26	50	76	145
	あてがはずれた	5	10	15	6	11	17	32

8. 施設物の希望

調査用紙の第6項「施設物は何もございませんが、次の施設でどれを御希望になりますか」の問に対して、「休憩所」と答えたものが242で全体の54%を占め、食堂の115と合すると約80%で、せめて休憩する所か軽い食事をする位の食堂を希望する者が、圧倒的に多いのである。次にケーブル園地が38あるのは、学校遠足の児童、生徒達が自然の中で遊び疲れた時に遊ぶような、子供向きの遊園地を望んでいるものと思われる。

9. 行楽客の希望と意見

調査用紙第7項「寺山公園をよりよくするため、交通機関や施設その他について、御希望される点をお書き下さい」に対して、行楽客の記入した事柄につき検討を加え、今後の開発計画の参考に資したいと考える。

この項に回答したのが 340で、その中約50%が道路の改善を希望している。実際鹿児島市内から寺山までの道路は吉野台地（道路行程の $\frac{1}{2}$ 以上になる）に入ってから全然舗装されていない状態であり、巾員も平均6mで場所によってはバスの行違いが不可能である。又鹿児島県特有のシラス土壌と火山灰質のため、少し雨天が続くとドロコ道に早変わりして車が通れなくなる所も多く、晴天が続くと砂埃が多く車の走る度に先が見えなくなる位で、沿道の樹木もその緑色を失い黄褐色になっている。又急カーブと急勾配の箇所も多いため、車の運行に時間を要し、行楽客にこのように道路の改善を痛感せしめたのであろう。この道路の問題は、寺山登山客にとり切実で、誰しもが感じその改修を希望しているのが現状である。

第11表 施設物の希望

回 答	秋 (1965)		計	春 (1966)		計	合 計
	10 月	11 月		4 月	5 月		
回 答 な し	4	3	7	11	25	36	43
旅 館	9	13	22	8	10	18	40
食 堂	43	37	80	29	6	35	115
休 憩 所	69	51	120	50	72	122	242
ゴ ル フ 場	0	1	1	0	3	3	4
キ ャ ン プ 場	6	6	12	0	0	0	12
ケーブル遊園地	7	8	15	9	14	23	38
そ の 他	6	10	16	0	2	2	18

交通の便では、現在寺山山上まで鹿児島市営バスが、1日に2往復しているだけで、休日の如く利用者が増せば、行楽客が思うように利用出来ないのも、従って市営バスの増発を希望するものが74あり、道路の問題と共に重要な希望事項である。

ここに注目すべき意見として「人工施設は何もない、現在のまま、自然のままに」と望んでいるものが9あることである。このことにつき行楽客の1人が調査用紙に記入した意見をそのまま

紹介してみる「この雄大で美しい景観があれば、俗悪なる施設は不要である。まずい施設をするとこの自然の景観を失う。山つつじがきれいだ。このような樹木を整備されたい。ただ汚さないための施設（塵捨て場、便所）は早急をお願いしたい」（原文のまま）。

この人は鹿児島市の居住者で、会社員、男（25才、）3度以上来訪している。寺山を訪れ「十分に満足した」項に印をつけている。要するに寺山のもつ自然的魅力を失わず、その機能を充分発揮できるよう求めている。これらの意見には、尊重すべきものがある。

次に少数意見であるが、「おおいに歩くべし」というのがるあり、^①「歩く運動」が盛んである時勢でもあり、若い世代や小学校高学年からの遠足には、片道だけでも徒歩で登山すべきであろう。

「道標の設置、案内板の設置」を求める声が12あるのは、始めて寺山を訪ねた人が、このような施設がないために迷っている姿をよく見かける。「水道、ゴミ捨て場の設置」、「便所の増設、掃除をすること」を合計して76もあるのは、公衆衛生上当然のことであり、早急に解決しなければならない問題である。

「ロープウェイの設置」を望むのは、海拔 425mのところから眼下に見おろす錦江湾は、わが庭のようで降りてみたいという好気心が、行楽客の中にあるのではないだろうか。

又県外から来訪された客の中には、こんなすばらしい所なのに、あまり全国的に知られていない。どうしてPRしないのか、もっともっとPRをせよとおしかりを受けた事もあった。

こうした行楽客の希望や意見を基盤とした最少限度の施設の改善が、目下の急務であり、出来る限りこれらの期待にそうよう努力することが望ましいのである。

最後に、元鹿児島市長勝目清⁽³⁾氏の「勝目清回顧録」から引用すると、「牟礼ヶ岡、寺山などの観光は、本来帯迫から菖蒲谷を通って行き、帰路を上之原にとるのが観光上効果的なのである。……今、寺山、大崎鼻展望所を中心としているのは第1期の観光開発とみるべきもので、引きつづき今の開拓団の広場から牟礼ヶ岡頂上を観光地として開発すべきであると私は考えていたが、それまでの実現は出来なかった。遠く霧島連峰を望み、眼下に国分、加治木、重富の平野を眺め、秀峰桜島をみると思えば、遙かに薩摩富士、開聞岳を認め、さらに薩南連山の上に金峰山、野間岳が姿を現わし、吹上浜の海から甕島、紫尾山と鹿児島県下を一望に眺めるとでもいえる大景観は、まったく他に比類なしとっていいのではあるまいか。箱根、熱海間の十国峠が立派なものだとのことであったので、行って見たが、雄大ではあるが牟礼ヶ岡に比較すれば単純である。上之原の素朴なソバなど、町の人々には何ともいえない好物である。大名竹（^{ダイミヨウチク}寒山竹^{カンザンチク}のこと）のタケノコにスミソでも添えて一杯やるのも、すこぶるいいものである。この味を案外知らない人が多いようである。さらに上之原の酪農を生かしたらどんなものだろうか。神戸市の背後にそびえる六甲連山の1部で乳牛をかい、来客にミルクをだしていたことがあって、吉野でどうだろうかと思ったこともある。吉野はカンショの名産地、地元ではカンショなどはと考えられるかも知れないが、市内の人たちには焼きイモにでもしてだされたら、天来の珍味となるだろう。こんなことが成り立つくらいまで吉野高原の観光ハイキングが発達するよう心から願っている。」

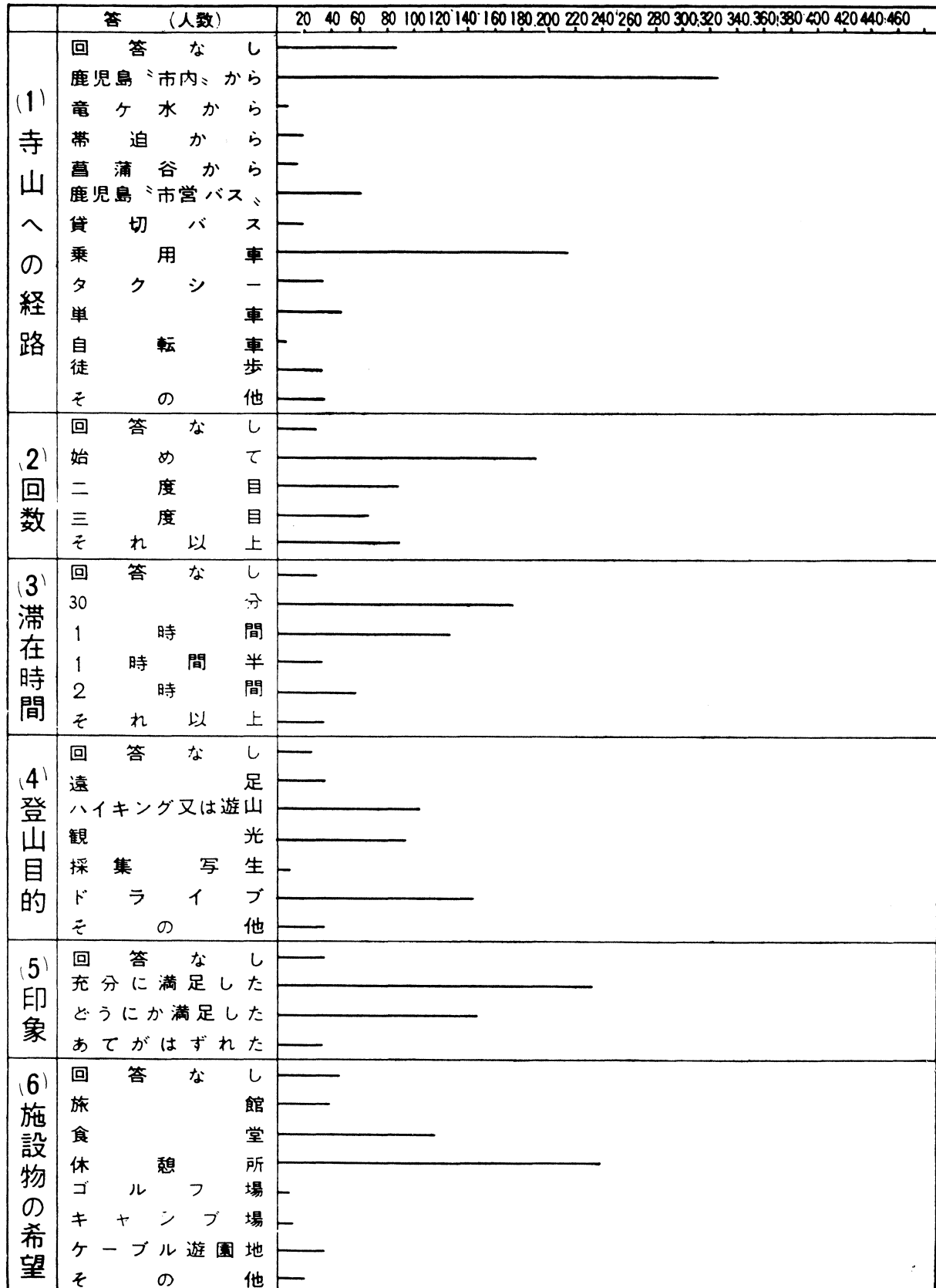
なお、以上述べた表をまとめて第4図と第5図に示した。

第12表

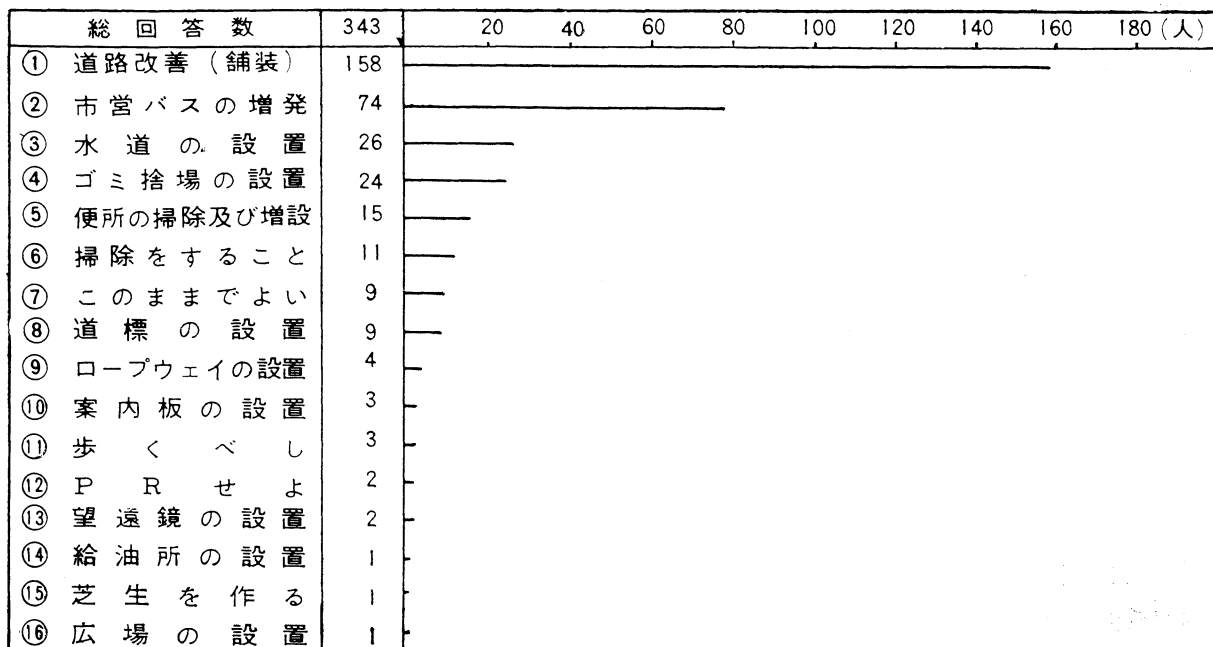
寺山に対する意見及び希望

回 答	月 別		計	春 (1966)		計	合 計
	秋 (1965)	11 月		4 月	5 月		
総 回 答 数	88	79	167	45	131	176	343
道路改善(舗装)	43	40	83	21	54	75	158
市営バスの増発	22	15	37	14	23	73	74
水 道 の 設 置	6	8	14	1	11	12	26
ゴミ捨場の設置	3	2	5	6	13	19	24
便 所 の 掃 除 及 び 増 設	0	4	4	1	10	11	15
掃除をすること	5	0	5	1	5	6	11
このままでよい	3	2	5	0	4	4	9
道 標 の 設 置	4	2	6	1	2	3	9
ロープウェイ の 設 置	0	1	1	0	3	3	4
案内板の設置	0	1	1	0	2	2	3
歩 く べ し	1	1	2	0	1	1	3
P R せ よ	0	2	2	0	0	0	2
望 遠 鏡 の 設 置	0	1	1	0	1	1	2
給油所の設置	1	0	1	0	0	0	1
芝 生 を 作 る	0	0	0	0	1	1	1
広 場 の 設 置	0	0	0	0	1	1	1

第4図アンケート調査の回答数



第5図 寺山に対する意見及び希望



IV 調査結果の総合的検討

Ⅲのアンケートによる調査1より9まで、寺山自然公園に来遊する行楽客の実態調査の結果を、種々の観点から考察してきたが、ここではこれらの調査結果を総合的に検討を加えてみる。

まず、寺山は鹿児島市さらに拡大していえば、全国各都市住民の憩いの場所としての使命を果たしていることが、その誘致範囲からわかる。

来遊する行楽客の男女比は、やや男子が多く、そのうち大人と小人の比は32:68(16才以上を大人、15才以下を小人とした)で、小人の数が多いのは学校遠足のためである。またこのうち大人(60才以上を老人層、30~60才を成人層、30才以下16才までの青年(高大学生を含む)層とした)の割合は 青年層:成人層:老人層=88:11:1でわかるように、寺山がいかに若い世代に魅力があるかを示すものである。このことは交通機関がよく発達していないので、若い男女には歩いてでも行けるが、老人にはそうはできず、故に老若男女いずれを問わず登山しようという近代的な山岳公園としての立地条件に、充分恵まれているとはいえないのである。だから寺山を訪れた行楽客の約50%は道路の改善を望み、さらに市営バスの増発を望み、そうして「水道の設置、ゴミ捨て場の設置、便所の増設、掃除をすること」等の希望が多いのは、公衆衛生上誠に当然な要求であり、これ程に利用者も多いのであるから、近代的な山岳公園としての最少限度の施設はすべきであり、それだけで充分であるから早急に解決しなければならない。

次に時間的にみた場合、午後に多く夕方にかけても来訪者があることは、乗物の便さえあれば市内から1時間たらずで行けるからであろう。又夏期には納涼の場所、キャンプ場、避暑地としても適していると思われる。

又本寺山は、その雄大なる自然と眺望を有するため、ハイキング遊山、ドライブ、観光に好適であることは、約80%がその目的をもって来遊していることからわかる。結論として、本寺山自然公園は予想以上の多数の行楽客があり、厚生的利用の面からみてその使命を果しているが、又反面未だ未開発の余地が多く残されており、まだ改善を要する多くの問題点がある。

V 摘 要

調査結果は次のとおりである。

1. 寺山自然公園を来訪する行楽客の誘致範囲は、所要時間1時間の地帯内と考えられ、鹿児島市が全体の約70%を占めている。
- 2 行楽客の職業は会社員、学生（小中高生含む）、公務員の三者が全体の75%、構成では半数近くが友達同志で、二人連れが全体の約40%、3人～6人連れを合すると80%である。
男子：女子は55：45、大人：小人は32：68で、さらに大人の割合では青年層：成人層：老人層は88：11：1である。
時刻別では午後からが70%、夕方から訪れるのが約7%である。
3. 交通機関は乗用車で訪れたもの48%、市営バス13%、単車11%、タクシー8%、徒歩7%等でコース別では市内からが71%である。
4. 利用回数では、二度以上のものが53%、滞在時間では1時間以内が67%である。
5. 登山の目的では、ドライブ、ハイキング又は遊山、観光の三者で全体の77%、その印象では52%が充分満足し、あてがはずれたのは僅か7%である。
6. 次に将来計画の参考になるであろうという予想から、行楽客の具体的な意見は次のとおりである。
 - 1) 道路の改善：将来における全地帯回遊路建設計画と現在における悪路の急速な整備。
 - 2) 施設物の設置：休憩所、食堂、旅館、道標、案内板、特に水道、ゴミ捨て場、便所の増設
 - 3) 風致、環境の浄化：風致の保護、環境の清浄化による快的な行楽地の形成。
 - 4) 交通機関の充実：レジャーブームに対応するだけの交通機関の整備、特に市営バスの増発。
7. 結びとして行楽客の利用傾向と、それに基づく計画の方針を説明する。
 - 1) 本寺山自然公園の行楽客は、小中高生徒の学校遠足を中心としたものと、大学生を含む青年層を中心とし、居住地別では鹿児島市が70%であり、職業的には給料生活者主体の都市産業労働者である。
 - 2) 従って彼等が寺山へ行楽する際に期待しているものは、豊かな自然の環境と風景であり、そうしてその中を快的に行楽できる、諸施設である。
 - 3) 故に、この期待を充たすためには、徒らに招かれやすい行楽地の都会化を避けねばならないが、最少限度の施設は急を要する。
 - 4) 以上の結果により、寺山に関する今後の休養開発における根本の原理となるのは、次のよ

うにいいうるであろう。

寺山にみられる諸行楽対象のもつ機能を十分発揮せしめ、かつそれを傷つけない限界内における各種利用施設の早急設置と、道路の改善、諸行楽対象相互間の連絡を円滑ならしめる交通路線、機関の系統的な拡充整備、さらにかかる開発による行楽対象の新しい開拓。

引 用 文 献

- 1) 京都大学農学部造園学研究室，：六甲自然公園の厚生的利用に関する調査研究。1～5 P，32～44P，53～54P。（1955）。
- 2) 同 上　：宇治川ライン地帯の厚生的利用に関する調査研究。2 P，18～21 P。（1957）。
- 3) 勝目清著：勝目清回顧録。272P，（1963）
- 4) 財団法人国立公園協会：国立公園論文集（I）。89～100P，（1964）。
- 5) 武居忠雄，秋山智英，伊藤敏共著：フォレスト・レクリエーション。133～140P，163～173P（1964）。
- 6) 中央林業相談所編：日本林業の現状5 観光と自然保護。135～136P，（1966）。

Résumé.

The objects of this studies are to reveal how Terayama Park should be managed in future for the recreational use as the wooded region of Kagoshima city.

This investigations had been carried out from October, 1965 to November and from April, 1966 to May.

The results obtained from this investigation are as follows:

1. The attractive area of hikers who visit Terayama park seem to restricted within the districts which take about an hour from the park. Therefore, 70% of all hikers is from kagoshima city.
2. Campany employees, students, and public servants occupy 75% of all hikers and the items of the composition of the hikers as follows:
Friends occupy nearly half of the visitors and a couple is 40% and it is about 80% of all visitors if we include the group of 3 to 6 persons.
The ratios between adult and child, man and woman, and between younger generation, grown up, and old people are 32:68, 55:45, and 88:11:1 respectively.
As to the time peoples who visit the park in the afternoon and evening occupy 70% and 7% of all the hikers respectively.
3. As to the means of communication passenger car, city bus, and motor bike,, taxi and walking occupy 48%,13%,11%,8% and 7% respectively, and 71% of all hik-

ers is from kagoshima city.

4. Of the frequency of use persons who visited the park more than two times are 53% and persons who spent the time less than one hour in the park are 67%.
5. The objects of the visitors are picnic, drive-picnic, and sightseen which occupy 77% of all visitors on the whole.

The persons who had good and bad impressions in the park are 52% and 7% respectively.

6. The concrete opinions of hikers who visited the park are as follows.
 - i. Improvement of the roads, i.e. urgent equipment of bad road at present.
 - ii. Set up of institution, such as rest room, dining hall, hotel, guide-post, damping ground, and increment of water-closet.
 - iii. Purification of the environment such as formation of comfortable pleasure by preservation of scenic beauty and purification of environment.
7. As a conclusion, tendency of use of the park by hikers and the policy of plan are as follows.

- i. Among the hikers who visit the Terayama park pupils in the school excursion and younger generation including students of college and university occupy a prominent part of all the visitors.

Of peoples who visit the park 70% is from Kagoshima city, and as regards to the occupation salary earners including workers of industrial town occupy a prominent part.

- ii. Therefore, matters which they expect when they visit the park are the abundant environment and scenery, and various institutions by which they enjoy the nature.
- iii. Though the cityfy of the park as seen in many places must be avoided to fall their expectation, it is need to provide the minimum equipment quickly.
- iv. From the results of the above researches the fundamental principle of development of recreation on the park in future may be said as follows.

“It is nessesary to display fully the function of many objects of hiking in the park and to equip quickly various equipment within the limits not to impair the beauty of the scenery and to better the roads.

Systematic equipment of traffic routes or facilities is nessesary to facilitate the mutual relation in the obiects of recreation smothly, and to develop the park for the objects of hiking by such improvement.”